

日本ラテンアメリカ学会

I 学会の設立

「日本ラテンアメリカ学会」は1980年6月8日、東京四谷の上智大学で開催された創立大会をもって発足した。ラテンアメリカ地域を研究対象とする学会としては、主に政治、経済、法律の研究者によって構成される「ラテン・アメリカ政経学会」が1964年に設立され、以後活動を続けているが、本学会はさらに範囲を広げ、人文、社会、自然諸科学のみならず、文学、芸術も含めた各分野にまたがる日本全国のラテンアメリカ研究者を結集し、相互の連絡、交流を深め、それぞれの分野における研究の発展をはかると同時に、同地域に関する学際的な研究を促進することを趣旨として設立された地域学会である(注1)。

本学会の英語、スペイン語、ポルトガル語名はそれぞれ、Japan Association for Latin American Studies, Asociación Japonesa de Estudios Latinoamericanos, Associação Japonesa de Estudos Latinoamericanosである。創立大会において10名の理事を選出し、理事の間の互選により増田義郎東大教授が初代理事長に就任した。事務局は東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学教養学部中南米分科内におかれている(担当者 恒川恵市)。以下創立大会から第2回定期大会前までに行なわれた学会の主な活動を略記する。

(注1) 学会設立までの経緯については、『日本ラテンアメリカ学会』設立にあたって……設立準備経過と趣旨……(『ラテン・アメリカ研究』<ラテン・アメリカ協会>X 1980年) 181~182ページ参照。

II これまでの主な活動

創立大会では総会に続いて、シンポジウム「日本におけるラテンアメリカ研究」および記念講演が行なわれた。シンポジウムは学際的学会の開幕を飾るにふさわしく、主な学問分野ごとに日本における研究の歴史と現状を把握し、今後の課題を明らかにするという趣旨のもとに、文化人類学(報告者・大貫良夫)、文学(同・木村栄一)、歴史学(同・染田秀藤)、経済学(同・水野一)、医学(同・安

羅岡一男)の各分野について報告がなされた。記念講演は、米国・ラテンアメリカ学会(Latin American Studies Association)会長(当時)のメサニラゴ(Carmelo Mesa-Lago)教授による「米国、ヨーロッパおよびラテンアメリカにおけるラテンアメリカ研究——その歴史と現状と問題点——」、およびブラジル・リオデジャネイロ連邦大学文学部長パレンテ・クーニャ(Helena Parente Cunha)教授による「カーニバル化と文学」(Carnavalização e literatura)であった(注1)。

1980年秋と81年春の2回、東日本と西日本の二つの部会に分かれて定例研究会を開催した。

第1回定例研究会東日本部会(1980年11月15日 アジア経済研究所)

- (1) アルゼンチンの労働運動とペロニズムの形成(1930~1945)(松下洋, 南山大学)(注2)
- (2) La generación argentina de 1837 y el romanticismo político(アルゼンチンの1837年世代と政治的ロマンティシズム)(松下マルタ, 南山大学)

第1回定例研究会西日本部会(1980年12月6日 大阪市立大学)

- (1) ラテンアメリカにおける民族学研究の現状(友枝啓泰, 国立民族学博物館)(注3)
- (2) ラテンアメリカ文学とナショナリズム(吉田秀太郎, 大阪外国語大学)
- (3) マリアテギにおけるインディヘニスモとマルクス主義の合流(原田金一郎, 大阪経済法科大学)(注4)

第2回定例研究会東日本部会(1981年4月25日 アジア経済研究所)

中央アンデス考古学——東大調査団の活動を中心に——(寺田和夫, 東京大学)

第2回定例研究会西日本部会(1981年4月26日 神戸学院大学)

- (1) アンチール諸島クレオール社会構造研究——マルティニク島における新教会議派——(石塚道子, 大阪薫英女子短期大学)
- (2) スタベンハーゲン著「開発と農民社会」をめぐって——原住民問題の視点から——(小林致広, 神戸

外国語大学)

本学会はその設立趣旨にもあるように、日本全国に散在するラテンアメリカ研究者相互の研究連絡、および国際研究交流を活動の重要な柱としている。そのためこれまでに会報1～4号を発行し、学会の活動報告の他に内外の研究動向、人物交流の紹介を行なっている。また学会機関誌として『ラテンアメリカ研究年報』第1号(1981年)をこのたび発刊した。学会会員数は創立大会当時160名であったが、1年後には200名を越え、日本学術会議登録学会の必要要件を満たした。

(注1) シンポジウムの報告要旨および記念講演の内容はいずれも『ラテンアメリカ研究年報』第1号(1981年)に収録されている。

(注2) これについては、松下洋「アルゼンチン労働運動とペロニズムの形成(1930-45)——<政労>関係から見たひとつの解釈——」(『ラテンアメリカ研究年報』第1号 1981年)18～47ページ。

(注3) これについては、友枝啓泰「ペルー人類学の現状」(資料と情報)『民博通信』No.12 1981年3月)49～56ページ。

(注4) これについては、原田金一郎「ペルーにおける共同体と社会主義——マリアテギにおけるインディヘニスモとマルクス主義の合流——」(『インパクト』5<特集:第三世界の民族と革命>1980年3月)88～119ページ。

III 第2回定期大会の内容

本学会の第2回定期大会は、去る6月6日(土)、7日(日)の2日間にわたり、アジア経済研究所の国際会議場その他を会場に開催された。初日には総会と記念講演、二日目は一般研究報告とシンポジウムが行なわれた。

記念講演は、国際交流基金の招きで来日中の、ペルーの代表的な詩人でペンクラブ会長、ソローレン(Javier Sologuren Moreno)氏による、ペルーの現代文学とくにアルゲダス(José María Arguedas)について。要旨は、アンデス山中の地方都市に生まれたアルゲダスは、自身はメスティーソ(混血)であったが、ケチュア語を母語として幼児からインディオ文化の中で育った体験をもとに、自分の文学を通じてインディオと白人の二つの世界の間の交流、二つの文化の融合の可能性を示した、というもので、講演終了後出席者との間で親密な意見の交換がなされた。

一般研究報告は三つの分科会に分かれて3会場で同時

に進行された。第1会場では主として人文科学関係4テーマ、第2会場では主として社会科学関係4テーマ、第3会場では自然科学関係3テーマについて研究報告と質疑、討論が行なわれた。

第1会場

- (1) 接触期におけるメソアメリカの社会構成(小林致広, 神戸市外国語大学)
- (2) スペインとラテンアメリカにおける土地制度の類似点と相違点(石井陽一, 神奈川大学)
- (3) チアパス司教時代のバルトロメ・デ・ラス・カサス(松尾佳枝, 東京都立大学)
- (4) 最近におけるラテンアメリカ教育の動向(皆川卓三, 神奈川県立衛生短期大学)

第2会場

- (1) メキシコとブラジルにおけるオーギュスト・コント実証主義の影響(三橋利光, 名古屋聖薔短期大学)
- (2) ラテンアメリカの宗教と政治(乗 浩子, 世界経済調査会)
- (3) ブラジルにおける日系進出企業の同化問題と日系人の役割(植木英雄, 拓殖大学)
- (4) ブラジルにおける養鶏業の発達(宮出秀雄, 東海大学)

第3会場

- (1) アルチプラノの水河と内陸湖の変動(野上道男, 東京都立大学)
- (2) ブラジル北東部における自然環境調査の成果について(田瀬則雄, 筑波大学)
- (3) ラテンアメリカにおける社会医学的諸問題——特にラテンアメリカの衛生指標に関する多変量の解析とブラジル北東部の課題評価——(山口誠哉, 筑波大学)

シンポジウムは「80年代のラテンアメリカをどうとらえるか」のテーマで、政治の観点から2名、経済の観点から2名の計4名のパネラーによる報告が行なわれた。

まずグスタボ・アンドラーデ(Gustavo Andrade)氏(上智大学)は、80年代のラテンアメリカをみる場合に内部要素、外部要素、超国家的要素の3点が重要であると、内部要素としては従来の権威主義体制のモデル、あるいはキューバ型の社会主義のモデルの有効性に疑問を提起した。外部要素としては、米国の対ラテンアメリカ政策を牽制する要因としてヨーロッパとくに社民党政権の西ドイツ、ミッテラン政権のフランスの政策、それに

ポーランド問題の重要性を指摘、超国家的要素としては、一国の範囲を超えたテロリズムの動き、軍人同志の連帯、多国籍企業の態度、カトリック教会の役割の重要性を指摘した。

次に加茂雄三氏（青山学院大学）は、ラテンアメリカの中の一つの亜地域として中米・カリブ海地域をとりあげ、この地域で起こる問題は、世界問題化する契機を内包していると指摘した。今日の中米・カリブ海は混沌の状態にあるが、それはこの地域が歴史的転換点に立っていることを意味する。これは一つには米国の「裏庭」的地位からの脱却をめざすという闘争的な側面からとらえることができるが、もう一つ見逃してはならないのは、歴史的にみて自己形成力の弱かったこの地域に、はじめて自分たちの国民国家、国民文化を追求するという自己形成の条件が出てきた、という創造的側面である、と主張した。

細野昭雄氏（筑波大学）は、ラテンアメリカの主要国を念頭に、今日までの発展の段階、成果を検討し、今後の展望を述べた。ラテンアメリカ諸国には、急速な発展に不可避の不均衡といった問題や、長期に時間をかけて解決していかなければならない構造的な諸問題が存在することを認めながらも、現在これらの諸国は新しい国際情勢への積極的かつ現実的な適応を示しており、今後は資源を有する中進地域として世界経済において重要な役割を担うであろう、そして先進国には失われたダイナミズムに代わる核として登場するであろう、というやや楽観的

な展望が提出された。

これに対して吾郷健二氏（西南学院大学）は、GNP指標でみるかぎりラテンアメリカは世界でも相対的に高い成長率を維持してきたが、それはこの地域のかかえる構造的な問題に手をつけずに、「生産力主義的成長志向」路線によって達成されたものであると批判する。一般的にいつて、外資導入と多国籍企業による工業化の促進という、いわゆる「国際化」戦略であるが、この戦略の帰結として国内所得分配の不平等、地域格差の拡大等の諸矛盾が激化している。そしてグローバルな国際経済の中にラテンアメリカ経済の今後を位置づけた場合、先進国における保護主義の傾向、エネルギー制約、環境・気象制約等から、「国際化」戦略は困難を増すであろうと警告した。

国本伊代（中央大学）、今井圭子（アジア経済研究所）両氏のコメントに続き、一般参加者からの意見が出され活発な討議が行なわれたが、時間的制約のため残念ながら途中で打切らざるをえなかった。本学会のように異なる専門分野の者が一堂に会する場合には、シンポジウムのテーマの選定が非常に難しい。次回からはより特定のテーマにしぼり、十分な事前の準備を行なうことが必要であろう。

第3回定期大会は、82年の同じ時期に大阪の国立民族学博物館で開催することが決定された。

（アジア経済研究所主任調査研究員 石井 章）